六角凧

かつては美濃紙100枚を張り合わせて作ったという、縦4.3m、横3.3メートル、畳約8枚分もの巨大な凧です。武者絵や美人画などが主な絵柄ですが、近年ではキャラクターやマスコットなどが描かれることも多く、色とりどりの大凧が空を舞い、空中戦を繰り広げます。

凧民謡

凧民謡（よっしょい節）は、今町・中之島の人なら毎年必ず聞く「大凧合戦」の風物詩。昭和初期に公募を行いましたが、良いものがなかったのか、招聘された選者の北原白秋氏が自ら作詞し、町田嘉章氏作曲、花柳徳次氏振付で完成し、今日まで受け継がれています。

六角大凧ができるまで

六角大凧は、「百枚張り」と呼ばれる凧。昔は100枚の美濃紙を張り合わせていたことから、こう呼ばれています。

六角大凧づくりは、「白凧づくり」と「絵付け」があり、地道な手作業により、一枚一枚仕上げられます。

毎年３月から準備を始め、４月に本格的に作業に取り掛かります。白凧ができると、５月から合戦間近まで絵付け作業が行われます。

※美濃紙（美濃判）：和紙・27.3cm×39.4cmのもの

白凧づくり

絵付け

発行：今町・中之島大凧合戦協会
お問合せ：見附市観光物産協会（見附市役所地域経済課内）☎0258-62-1700
中之島観光協会（長岡市中之島支所産業建設課内）☎0258-61-2013

新潟県無形民俗文化財指定

見附今町・長岡中之島

大凧合戦

公式ガイド

6月第1土曜から3日間開催

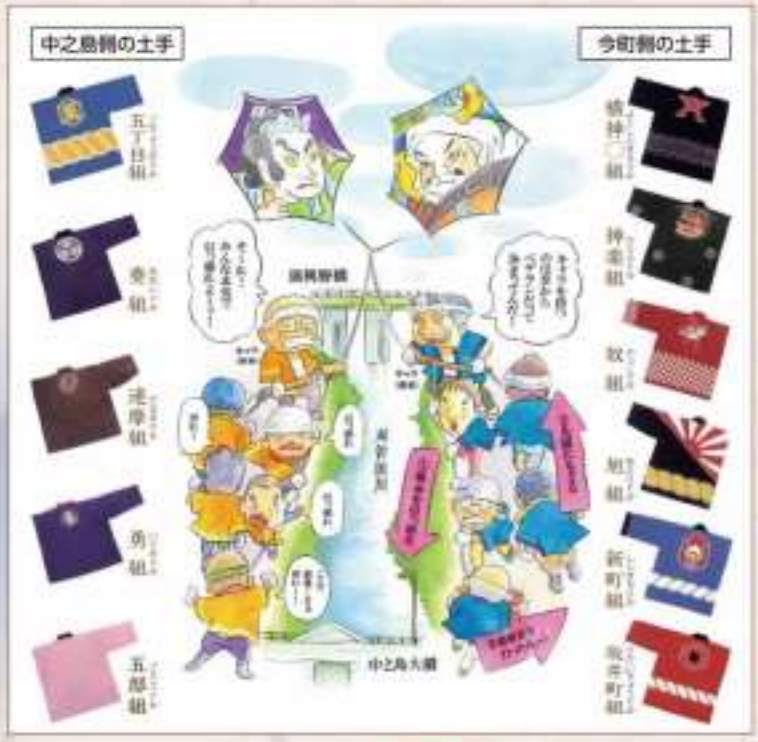
守門岳と弥彦山が眺望できる刈谷田川の両岸から、六角の凧を揚げて競め合う合戦です。

豪壮空中戦

起源　三百数十年ほど前、信濃の紙商人が、たまたま端午の節句に今町に立ち寄った際、刈谷田川堤防にて大凧を作り、大空に揚げたのが始まりとされています。その後、江戸時代の天明年間に、雨季に度々決壊した刈谷田川改修の堤防を踏み固める一策として行われた凧揚げが毎年の恒例行事となり、今に至ったといわれています。

組

町内などの単位で「組」と呼ばれるチームを作って参加します。今町・中之島で11組あり、今町の町内で組織される組が8組、中之島の町内で組織される組が3組です。今町育の組のうち、葵組と五丁目組が刈谷田川の左岸（中之島側）から凧を揚げます。



空中戦

刈谷田川両岸から揚げられた大凧を上空で巧みな技で操り、空中で二重三重と糸を絡め合います。キャラと呼ばれる滑車に糸をかけ、組長の笛の合図で20～30人の男達が糸が切れるまで引き合います。

①上空で凧が絡んだら、キャラに凧糸を通します。
②組長の笛の合図で、両者同時に一気に引き合います。

●凧糸

凧糸は、太さ8～12mmの麻糸、またはクレモナロープを使用。

●キャラ

凧糸を掛けるための滑車。うまく操るには経験と熟練技が必要。

地絡め（じがら）

凧を揚げるには適度な風が必要ですが、風が強すぎると中断し、無風の時には凧が揚がりません。こういう場合でも楽しめる合戦方法が「地絡め」です。

①対岸の「組」より、対戦相手を募ります。
②地上で凧糸を絡めます。
③係員の合図により、両者同時に一気に引き合います。

懸賞

スポンサーにより懸賞が掛けられる合戦には、凧糸に**白か赤の布**が付いています。この大凧を絡め取った「組」には、懸賞（賞金・酒など）が贈られます。

観覧者もスポンサーとなり、懸賞を掛けることができます。（本部桟敷にて受付）

●会長賞争奪大凧合戦
土曜・日曜２日間の合計得点で競います。空中戦の勝者に３点、敗者に１点、地絡め戦勝者に２点敗者に１点とし、２日間の合計点数で第５位まで表彰します。
表彰式は、２日目終了後に行います。

会場図 観覧無料

※堤防上は、桟敷を除き組員以外立入禁止です。

大凧合戦見物のお願い

●見物は決められた場所で
合戦場での見物は、危険を伴う場合があります。必ず決められた場所でご覧ください。

●頭上に注意
風の強弱や風向きの変化により、大凧がバランスを崩して落下することがあります。見物の際は周辺や頭上に注意してください。

●車の駐車について
車の駐車は決められた場所でお願いします。合戦場付近の路上駐車は禁止です。

参考資料：今町・中之島大凧合戦リーフレット（監修：加茂市教育委員会）、刈谷田川大凧合戦リーフレット（制作：刈谷会）